

彫刻家と画家。塑像の技法を用い、FRPの表面への均質な塗装によって、物質感が廃された人物像で知られる菅原玄奨と、支持体となる金属板に傷を付け、酸化させ、多重的なレイヤーを形成する東城信之介の2人は、前出の肩書きで語られることが多いかもしれない。しかし、マテリアルの表面性に互いの親和性が認められる今回の二人展では、作品同士の特徴が混ざり合い、彫刻と絵画という既存の認識は、ほとんど意味をなさないだろう。むしろ、そこで期待されるのは、混迷の続く現代に対し2人が切り開く、世界の再現前化と呼ぶべき事態である。このことはつまり、私たちを取り巻く世界そのものへの問いかけに、両者の表現が根源的に関わっていることを意味している。

これまで制作されてきた人物像において、菅原は特定の人物を対象とせず、平滑な表面性でもって匿名性を担保してきた。それは、都市の空間にあてどなく漂流する人々を思わせ、一定のかたちを保持しながらも、複数のイメージの混淆が意図されてきたといえるだろう。作家が関心を寄せるファッションという現象の移ろいやすさとも、その造形は関係付けられている。着衣の男女像は、均質的であると同時に流動的であり、溶け合う柔らかな形象において、現代という時代とも相似的であるのだ。本展で菅原は、1960年代に量産が開始されたパントンチェアと多肉植物であるサボテンの作品を、女性像と同質のグレーの彩色を施して展示を試みる。膨大なモノと人、情報が移動、流通するハイパーリアルな現代社会において、生命の有無に価値付けられることなく、すべての等質さが強調される菅原の作品は興味深いものだ。また、静止を強く印象付けるサボテンは、コロナ禍の時代を象徴するものとして、幾度となく移動を制限された私たちそのものを想起させるだけではない。接木を可能とする生態によって、個であり、かつネットワーク化された群（集）という二重性を、人物、そしてレディメイドであるパントンチェアと等しくサボテンも帯びている。

東城においてもまた、作品の表面には一義的に還元することが不可能な複数性が見出せる。油性インクや顔料など、様々な素材を鋼板に用い、繊細で複雑な光景を現出させる東城の平面作品は、どこか茫漠な、ある種の混沌とした印象を鑑賞者に与えるかもしれない。だが、それは作家自身の共感的な心象風景であり、かつ壁面に描き込まれたグラフィティにおける「タギング」と呼ばれる記名的行為であり、複数のレイヤーの表面への実装こそが賭けられてきたといえるのだ。その時、きわめて臃げな個の知覚と記憶の風景として、同時に無数の人々によって差異的に形成される文化や歴史を痕跡として示す壁として、作品は鑑賞者の前に立ち現れている。本展において東城が試行するのは、「色を無くす」と作家が語るような、無彩色の世界の生成である。それはまた、不確かな世界を存在させるというこれまで試みてきた作品制作の意義を、菅原の作品との共鳴によって問うことになるだろう。

菅原と東城による共創造的な試みとして本展を捉えるならば、展覧会タイトルの「Have you ever seen a ghost?」は、言いえて妙だ。なぜなら、「ghost（幽霊）」とは可視と不可視の間にのみその存在が許される点において、きわめて存在論的な対象であり、「此方」と

「彼方」という異なる世界の往還が、そこでは仄めかされているからだ。速度を伴って流れ去る現代のイメージを、虚な人体表現に仮託する菅原の彫刻作品と、時制と空間を攪乱させ、自己と他者が不分別となる風景としての東城の平面作品は、表面という場にあえて留まることによって、別の世界を媒介するインターフェイスとなる。それぞれの作品がその触覚的な表面性によって、私たちの眼前に現出させるのは、私が、あなたが、あるいは誰でもない何かが帰属し、かつ脱領域化される世界の複数性であり、特異性である。

森啓輔（千葉市美術館学芸員）